



林権澤監督最新作

風の丘を越えて

ソビエト
西便制



ゲスト
佐藤 玲子
出 海 悦子
外 山 善子
宮 崎 暁美
地 畑 寧子
勝間由美子
安 世玉

特集 韓国映画。 発見!

韓国映画（一部朝鮮映画）を特集しました。
『風の丘を越えて』は韓国で大ヒット、日本でも話題になりました。まず、韓国映画への導入編としてとくでお楽しみ下さい。
次ページに監督等のインタビューが掲載されています。

◆とく参加者

佐藤

出席者全員が観てるなんて珍しいわね。今回は前号の『月はどっちにでている』のとくに出ていただいた安さんにまた来ていただきました。まず、それぞれの感想から：

外山

パンソリの魅力が良くわからないとちよつと退屈かもしれないわね。それにこの映画はとても東洋的よね、ああいう儒教思想なんて西洋人には理解できない部分だと思うわ。ベン（夫、米人）なんか時々私より東洋的なところがある人だけど、親孝行という言葉は知っていても身体ではわかってないって感じあるもんね。

佐藤

パンソリって浪曲みたいね。物語性があつてこんな風に悲しみを表現する音楽が韓国にあったことを知って驚いたわ。お父さん（金明坤）がもつと年寄りかと思つたら意外と若くて素敵な人だったのですっかりファンになつてしまった（爆笑）試写会に行った安さんに聞いたら来日した父娘役のふたりがパンソリを歌ってくれたんですって。謙虚な人柄らしいし、パンソリにも造詣が深くてシナリオも彼が書いたんですって、素敵!!

勝間

文楽の義太夫にも似てますね。ナレーターでもあるし、時には主人公やほかの人物も演じ分ける…。あと、あのお父さんが歌う曲の中にテンポが早い曲があつて、ラップみたいだと思つたわ。

宮崎

映画そのものはよかったけど、私はどうもパンソリが好きになれなかつた。パンソリより旅芸人が移動していく時バックに流れる韓国のニューミュージシャン、金秀哲という人の音楽の方に魅かれたわ。それにパンソリより雅楽のような…何てつたっけな？

安

サムルノリ？

宮崎

そう、そっちの方が好きだな

地畑

記者会見の時に言つてたけど歳とつてる人でもTVとかラジオでパンソリが流れるとチャンネルを回してしまふくらいパンソリはすたれていたみたいよ。でも若い可愛い女の子がパンソリを歌つたというので古典芸能への認識が芽生えたのね。本国では先生が生徒に薦めたことなどもあつてそれもヒットの一因になったみたいね。

出海

監督のインタビュをTVで見たんだけど、彼は「西洋人の映画感覚と

安

東洋人とは違う。ハリウッドとかヨーロッパとは同じところでは太刀打ちできない。では国際化の中で各民族が誇示できるものはなにかというところで、では自分の国に目を向けてパンソリをやろうと…」思つたんですつて。でも、今の若い人つてこういう認識ないのにどうしてあんなに韓国ではヒットしたのかしらね？監督が今、言つたようなこと思つていたのを、丁度一般の人も思つていたんだと思います。あんなにアメリカからの文化がどんどん入りこんできて自分たちの固有の民族の文化というものが忘れ去られていきますよね。私自身の中にも何かそういうものを求めているところがあるので韓国の人もそうだったんじゃないかと…思つたんです。

◆盲目論争

出海

韓国の人たちは日本人よりも家族関係において保守的なところがあるなつて思つたの。私たちと同世代の人はこの映画を観て反発しなかったのかしら？

佐藤

どういうところで？

出海

父が娘を盲目にしてしまったじゃない！

安

西洋で受け入れられなかったのは、そういうところらしいですね。

出海

そう、あれは普通に考えたら裁判ものよ。そういうところがあるのになぜヒットしたのか、それがわからないの。

勝間

日本人が映画を観る比率と韓国人の観る比率が違うのではないでしようか？

安

父にああいう目に合わされても恨むことなくどちらかというと感謝しているというのは韓国人の発想らしいなと思ひました。

出海

「韓国らしい」と客観的に見れることと自体、あなたはすでに国際化してる。

安

でも、映画の中で娘が、なんで私をこんな風にしたのって言つてしまふと映画としては面白くななくなつてしまいますよね。

出海

彼女に恨（ハン）を持たせるために父が「私がやつた」というと「わかつてました」と驚かない…

安

そのセリフ、言わせたかつたんでしようね。

出海

あのところゾーっとしてしまつた。

地畑

どうしてその点に眼がいくのかな？
芥川龍之介の小説の世界じゃないけど芸術を極めるって尋常じゃないところもあって当然なんじゃない？

この映画は私たちの国にもこういうすごい芸術がありますよ、こういう優れた古典芸能がありますよということを言いたくて作った映画だと思うから、そういうことは問題じゃないのよ。

宮崎

芸術家の世界では自分の体を傷ついても芸を高めようとするところがあるんじゃないの？それほどまでして芸を高めるといことが一般の私たちにはとても理解できないけど……

佐藤

あれは、芸術の昇華という視点でしか観なかったわ。自分でも盲目になつた方が精神をより高揚できると彼女も思っていたんじゃないの。

出海

なるほど……でも何度もうけどそういうものが韓国で記録的にヒットしたのはなぜなの？

佐藤

映画としてレベルも高かったのでは？

地畑

高い、高い。

佐藤

映像もきれいだし……芸術性も高い。お父さんの演技もうまいし（笑い）
あのお父さん、許せない!!

出海

安

私自身はアジア人なのだけど、育ってきた環境が西洋風だったのでこういう映画を観るのは凄くショックなの。まあ、こういう映画を観ることで、それが認識できたんだから、逆にいいことだったのかもしれないけど。

パンフにも「これを見ることによってアジア的なものを発見できる」というようなことが書かれているんですが、試写会のあとでカメラマンが立ってスクリーンをさして「これが、韓国なのです、在日のみなさん」と言ったんですが、私はこのことばに反感を覚えたんです。確かに美しい田園風景で今まではこういう韓国映画はあまりなかったと思うんですが、そう言われると、かえって日本にだって美しい風景はごろごろあるわい！と……彼の言葉が素直に受け取れず自慢気に話しているようにとってしまってます。

◆父と娘が近親相姦しない理由

佐藤

ところで、あの父と娘は他人なのねもらわれたんだから。二人は師弟関係でもあるんだけどと深く勘繰

って男と女の関係があるんじゃないかと……

地畑

そうそう

佐藤

安さんに聞いたたら……

安

そんな風にとる人がいるのかと驚いたんです。近親相姦なんかしたら、それこそ、犬畜生以下と言われる。こういう儒教思想は、根強く残りますから。

出海

男と女というか所有するしないの関係、あの男は娘をいつも側に置いておきたい。紐で縛られて延々と歩いて行くシーン（勿論眼がみえないせいでもあるのだけど）に屈辱を感じたの。

佐藤

それは違うわ、私は彼女はわかっていて薬を飲んだんだと思う。パンソリという芸術をきわめたいと思ってるだけで、なにも従属してるんじゃない。

地畑

私も眼に悪いと思ってもああいう時はきつと薬、飲んじゃうわ。

勝間

普通の人だったらそこまでしないと思ってます。弟は普通だったから逃げたんです。

地畑

お父さんと彼女は天才なのよ。弟はお姉さんにコンプレックスを持っていたんですね。

勝間



地畑

拾ってもらった恩が深く、それに従ったという面もある。

外山

ここでの恨（ハン）って盲目にした恨みではなく、人生に対する恨（ハン）なのではないかしら？

出海

物語では「そのことで俺を恨め、そしてそれを力にせよ」って言うてるのよ。

地畑

その通りよ。さっきも言ったけど、芸術が主体の作品なのだから、一般道徳でくると苦しい…

出海

じゃ、芸術家は人を傷つけてもいいわけ？

地畑

そうすると現代の欧米的の発想にな

宮崎

っちゃうのよ。
よくはないけど、ストーリーとして入っているだけだ…

佐藤

家族の絆が韓国は特別強いようで、近親相姦なんて朝鮮、韓国では、特にタブー視されているようです。

佐藤

それを知ってれば安心してみられたのに…（笑い）

地畑

私も同感!!（笑い）

◆ポルノチックでなく質の高い作品

出海

「韓国では以前より民主化が進んできたが、家族の中に民主化がすすんでこそ本当になる。男女の尊重しあう関係こそ平等である」と監督は思っているんですって。これとこの映画となにか関係があるの。この映画は平等が成熟してないという例なの？これを観ることによって今の家族の形を考えてみようっていうのかしら？

宮崎

出海さんがそうとるなら、それはそれでいいけど、私はそういう映画としてはみていない。この映画自体はあくまで、消えかかっていたパンソリをみなおしたいという発想から出てきたものだと思う。

勝間

韓国では日本ほど伝統芸能が大切にされていなかったのではないでしようか。日本では民謡をする若者もいるし、歌舞伎なんかも人気がある。韓国でもこういうもの（パンソリ）があったんだというんで強いインパクトを持ったのかもしれないね。

出海

岩の上で彼女がうたうパンソリは迫力があつたわね。

安

ああいうリズムはいいですね。みるとドンドン入り込んでいっちゃう以前パンソリの国宝級という人がきてコンサートにいったのですが、全然理解できなかった。でも、この映画を観てパンソリに対する考え方が変わりました。

佐藤

ところで、韓国映画ってポルノチックなのが多いといわれてるけど…

出海

日本はアダルトと普通の映画と分かれているけど、韓国ではどのようになってるのかしら…

外山

ポルノ的なところを極力おさえたことで、内面に鬱積して、いいものができるってこともあるからね。

宮崎

この作品はそういう部分をまったく排した質の高い作品だったわね。

（まとめ 佐藤）

『風の丘を越えて』

（西便制（ソビエツジエ））

合同記者会見より

話題の韓国映画『風の丘を越えて』の日本劇場公開を記念して、この作品の監督・林權澤（イム・グオンテク）監督、撮影監督・鄭一成（チヨン・イルソン）、主演男優のみならず脚本も担当した金明坤（キム・ミヨンゴン）主演女優・吳貞孩（オ・ジヨンヘ）製作会社社長の李泰元（イ・テウオン）の五名の方々が去る五月に来日され、記者会見を行いました。以下は、その会見の一部です。（以下敬称略）



左より主演男優・金明坤氏、林權澤監督、主演女優・吳貞孩氏、撮影監督・鄭一成氏、製作者・李泰元氏（泰興映画社社長）

パンソリについて

金明坤

「パンソリは韓国においても消えゆくかんとしている伝統音楽なのですが、パンソリに馴染みのない日本の方々がこの作品をどのように観て、感じていただけるか、非常に緊張しています。韓国におけるパンソリの位置付けとしては日本の歌舞伎と似たような伝統芸能の一つにあたります。パンソリは謡い手が一人ですが、それが発展した形で複数の人間が謡うものもあります。大衆音楽としては残念ながら疎外された存在で、若者との距離も若干あるように思います。今はこの作品がきっかけになってパンソリがブームになって、熱心にパンソリを観る人が増えたようです」

吳貞孩

「私はもともと韓国の伝統舞踊を子供のころから習っていて、その舞踊教室を通して偶然パンソリを習う機会に恵まれました。子供の時初めてパンソリを聞いてから惚れ込み、それ以来ずっと続けています。そして今回パンソリをテーマとした

この作品に出演という運びになったわけですが、最近パンソリを習う人が増えて、これのみならず国楽つまり広範囲での韓国の伝統音楽に興味をもってくれる人が増えたようです」

作品の製作過程及び作品の社会への波及

林權澤

「文芸性の高い作品という点で製作には不安がありました。しかし、結果的には予想外のヒットで私自身とまどいました。韓国は、日本の支配下の時期には日本文化の中にあり、解放後韓国文化が現れるかと思いきや西洋文化が韓国の中の文化の代表という形になりました。つまり韓国は自国の文化というより外国の文化の影響をうけて長い間今日まで至っているのです。」

今日、人々の中に経済的にある程度のゆとりができ、自分というものをもう一度みるゆとりが出来てきました。このような時期に、自国の伝統芸能をテーマにしたこの作品が現れた。これがヒットにつながった理由だと私は考えています。また、30代〜40代のマスコミ関係

者がこの作品を大々的に宣伝して下さったこと、教職にある人たちが生徒にこの作品を薦め感想文を書かせたりなど、学校の授業の中でこの作品を取り上げてくださったというのもヒットのもとだと思います。

この作品をきっかけに自国の社会認識が高まった、あるいは韓国人としての自分を知るといふきっかけになったという声も聞いています。

撮影監督の鄭一成氏は、自国の撮影監督の中で、最も深みのある画を撮ることができる撮影監督です。作品に対しての解釈が私と一致していて、この作品でも監督である私のイメージ以上のものを撮ってくれました。ロケーション場所は、単に騒いながら流浪する主人公たちの人生に合わせた風景を選んだまでなのですが、この作品の風景の美しさに感銘を受ける方が多いのは、一重に鄭一成氏の撮影の力によるものだと思います」

鄭一成

「古い世代(1929年生)の私でさえ、パンソリには興味がなく、テレビやラジオでパンソリが流れると思わずチャンネルを変えていました。私のような世代こそがこ

のような伝統音楽を守っていくべき立場にあるのです。当初次回作『太白山脈』の撮影が先に予定されており、突如この『風の丘を越えて』が製作されることになり、パンソリに知識のなかった私は、不安を感じていました。しかし今、このような伝統芸能に興味さえ持たなかった自分を恥じ、『風の丘を越えて』の製作に踏み切った林監督に対し深い尊敬の念を抱いています」

作品の中の恨(ハン)の概念について

林權澤

「韓国人にとっても恨(ハン)を定義づけることは難しいことです。これをテーマに多くの映画が作られ、研究者による本までも書かれているのです。それだけ恨(ハン)は難しい概念であるわけですが、私があえて説明するなら、生活し生きていく過程で蓄積されるものが恨(ハン)だと思っています。生きていく過程で苦痛や悲しみといったものがありますが、それをもたらしただけのものに対する復讐とか報復といった日本語でいう恨みといった意味ではなく、生きていく上で蓄積され

そして自分自身で消化させていくものが恨(ハン)というもののなのです。

この作品は、パンソリを語りながら流浪する人たちを描いた作品で、彼らの中にこの恨(ハン)が積もらざるを得ない運命を描いた作品です。しかし、私はこの作品で彼らの恨(ハン)をテーマにしたわけではありません。テーマはあくまでも私たちの中で失われつつある素晴らしい伝統(芸能)を映画の中で息づかせようとしたことにあるのです。確かに語うことで人生を綴っていく主人公たちが語り続けることで恨(ハン)をといっていくのかもしれない。しかし、私が描こうとしたのは、私たちの伝統芸能パンソリがこんなにも素晴らしい、美しいものであることが立証したいといった意図にあったわけです」

韓国の映画状況

李泰元

「韓国国内で上映されているのは、大半がアメリカ映画で、韓国映画の占める割合はわずか3.5%という状況で、やるかたない状況です。これからもっといい作品

を作っていかねばならないし、同時に映画市場も整理が必要な状況にあります。そのような状況の中で、この作品の前に手懸けた『將軍の息子』が大ヒットし、続くこの作品も大ヒットしたわけです。私自身プロデューサーという立場上、金銭での儲けを追求しなければならぬのですが、林監督に多大な信頼をおいているので、彼が作りたいという作品なら、たとえヒットが見込まれないものでも製作する所存です」

次回作について

具貞孩

「次回作は、林權澤監督の『太白山脈』です。バルチザンを描いた作品ですが、私は、巫女役を演じています。韓国の女性として非常に大事な役柄だと思います」

林權澤

「現在撮影中の『太白山脈』は、巨額を投じています。プロデューサーからは思い通りに撮るようにと激励を受けています。作品は1948年から1953年まで韓国で活動したバルチザンと彼らを討つ

人たちの衝突を軸にして朝鮮戦争という韓国にとつて試験の時代において、いつたいあの頃の状況はなんだったのだろう時が流れた今日、あの状況を今どういうふうに捉えるべきなんだろうという問題提起も含んだ作品です。

イデオロギーが人間をより幸福へと導くものとするならば、多くの人に犠牲を強要し、その上に成り立ったイデオロギーというものは一体なんだったのか。

結局は、人々に何ももたらしはしなかったばかりか、多くの犠牲だけを人々に強要した。もし将来こうしたイデオロギーが存在するようになるなら、決して人を犠牲にその上に成り立つようなものであつてはならないという願いをこめて作っています」

(以上まとめ 地畑)



*とく及びこの記者会見をお読みになり、この作品が自国の伝統芸能及び自国人としての意識や自国の歴史の喚起に根ざしていることはお分りいただけたと思います。私はこの作品を観、製作スタッフの方々のお話を聞いて、今年上半年に日本でも大ヒットした『さらばわが愛 霸王別姫』が頭に浮かんできました。国の状況も歩んできた歴史も国民性も全く違う国同士の作品ですが、図らずも時期を同じくして作られ、日本と近距離にあるアジアの国で、自国の伝統芸能を現在から鑑みるという視点をもつという点では、近似していると思います。自国作が自国で低いシェアしか占有できていないというのは、韓国も日本と同様のようですが、その苦しい状況の中であえて『風の丘を越えて』のような作品を作った製作者たちの映画に対する真摯な姿勢には頭が下がる思いです。今、ブームが広がりにつつある中華系の映画群に比べ、まだまだ浸透していないのが韓国映画ではないでしょうか。アジアの他の国の映画はよく観るのだけれど、どうも韓国映画を観るのは苦手だという声をよく聞きます。かくいう私もその一人ですが、この作品が韓国映画に親しむ第一歩になってくれればと思います。(地畑)